2020東京五輪を機に日本人のタバコ感を変える

山本由美子 フリーライター
元たばこれす代表・反タバコ運動家

東京オリンピック開催で沸騰するタバコ問題の滑稽さ

世は理不尽に満ちている。事例を挙げれば枚挙に暇がない。が、誌面は限られているので、日本の、そして日本人のタバコ問題に絞って触れたい。この国の、世界から大きく遅れを取ってメダルには程遠いタバコ問題の今を一緒に考えてほしい。

昨今、外国のタバコ規制はかなり進んでいる。もはやタバコをいつでもどこでも吸える時代でないことは、世界の多くの人が実感し、承知しているはずである。勿論日本人も。

しかるに、五輪誘致の決定で欣喜雀躍した人々が、ではこれまでの開催国に倣って、日本も禁煙オリンピックにしましょう、と言われた途端に、フリーズしちゃってる、漫画のような現況。スポーツにタバコは論外。受動喫煙防止のためにも、会場は禁煙にして、東京も禁煙都市にしましょう、と言ってるだけなのに、どこがご不満なのだろう。何を躊躇するのだろう。

エンブレム問題も、国立競技場問題もすったもんだのあと、やっと動き出したいわくつきの東京五輪。加えて、おそらく多くの日本人は関心も予想もしなかったであろうタバコ問題の盛り上がり。あらぬことか不協和音で軋みだした。

素直に、「そうしましょ、そうしましょ」と言わない言えない歴史、しがらみ、国民性、タバコ体制がこの国にはある。禁煙五輪なんてとんでもない、と眉をひそめるタバコ族議員の面々も垣間見える。

この国で反タバコ運動を展開することが、いかに困難かは、そこに身をおいた者でないとなかなかわかってもらえないかもしれない。日本で反タバコの運動が生まれたのは40年近く前に遡る。タバコはいやだ、と

声をあげ、あちこちでタバコ弱者が大小のグループを結成し始めたのだ。タバコの煙に耐えられず、苦しいとさえ感じる人達だ。当時私達はわがままな変人扱いをされたものだ。

「タバコがいや？　煙がいや？　おかしいんじゃない？」。

「タバコのどこがいけないの。いやなら向こうにお行き」。

「国が販売を認めてるんだから、悪いわけないでしょ」。

「タバコくらいに目くじら立てんと、皆と仲良くやってくほうがいいんと違う？」。

「あんまりタバコを悪く言うと、喫煙者を親に持つ生徒が親に不信感を抱くので、禁煙教育はお手柔らかに願います」。

声を上げれば心に傷を負う。プライドさえも傷つくことがある。黙って耐えれば敵意に満ちた反応を見聞きせずにすむ。それはどんなに楽かもしれない。でもそれでは世の中は変わらない。何より私は、受動喫煙で呼吸が苦しくなる。反タバコを訴えるのは命を守るためでもあった。いきおい、これはライフワークとなった。

運動を始めた当時はタバコの有害性もさほど公にされておらず、受動喫煙という言葉も市民権を得てはいなかった。街にはタバコ広告が跋扈（ばっこ）し、あふれていた。駅も、バス停も、レストランも、ホテルロビーも、銀行も、歩きタバコも……街は紫煙に包まれていた。

大げさではなく、よくぞ私は有害な猛煙の中を生き抜いて来たと思う。

タバコの煙と悪戦苦闘した命がけの半生

記者をしていた私は、会議でのタバコ、インタビューでのタバコに音（ね）を上げていた。原稿書く時も煙攻め。社員食堂も灰皿あり、新幹線に禁煙車両もない時代の出張では連結部に立ったまま悔し涙を流した。何と生きにくい社会かと。タバコが、社会が恨めしかった。

唯一息抜きの映画もロビーに灰皿、ゴルフ練習場にも行けやしない。冠婚葬祭で不義理もした。コンパも同窓会も居酒屋も行きたくても行けない悔しさ。

勿論、私は声を上げ、改善を要望し続けた。それはおおよそ屈辱的な日々でもあった。会社に、交通機関に、店に、施設に、レストランに、行くとこ行くとこに要望やクレームを出すという仕事が待っていた。しかし、返事は冷たかった。受動喫煙被害を論ずるには機が熟してなかったのだ。

思い余って仕方なく、喘息（ぜんそく）患者を装ったこともあった。すると、すぐ火を消してくれた。口で言うのがしんどくなって「私はタバコが苦手です」と書いた紙を持ち歩いたこともあった。タバコを吸っていた人はそれを見ると素直に火を消した。日本人はある意味で、かように優しいのだ。

しかし、こんな偽装で禁煙されてもうれしくない。心苦しいことはいうまでもない。罪悪感がある。何より、有病者、障害者だからという理由で禁煙「してあげる」では、本物の禁煙意識は育たない。

日本人は本当に心優しい。外国人もこぞって言う。だのに禁煙の話になると、不快な反応が多かった。睨（にら）まれるのが常。やっとちらほら禁煙の掲示が見かけられるようになった頃、それでも守る人は少なかった。禁煙ですよ、と声かけすると、怒り狂う男も何人か遭遇した。そのタバコを手の甲に投げつけられたこともあった。まさに命がけの反タバコだった。

幸い私は記者という立場で、反タバコの記事を書く機会をできるだけ作り、タバコの害や受動喫煙について訴えてきた。メディアにタバコ問題でコメントを求められることもあったが、タバコに異議を唱えるとはけしからん、とばかりに脅迫状が送られて来たこともあった。タバコ社会の怖さに怯（おび）えた。

「公園」とは、大人から子供まで人々に開放された公の園です。そこに、立派すぎるタバコの吸い殻入れを用意し喫煙所とする感覚を、オカシイ？　と思わない現在の日本です。

闘いというに等しいタバコとの関わりが続くのだが、ついに大好きな記者という仕事までも辞するに至った。タバコには勝てなかった。悔しく惨めでもあった。しかし全身タバコ臭で帰宅するおぞましさと不快感に毎日打ちのめされる苦痛に耐え続けるのは限界をとっくに超えていた。タバコ煙がいやで、浅い呼吸しかしてなかったらしく、肺の具合が悪い、と医者に言われてしまったことも一因である。

もう少し遅く生まれていたら……と思う時がある。あの頃、同情は寄せてくれても、社内を禁煙とする空気は皆無だった。聞けばタバコがいやな同僚も上司もいたが、みな普通に我慢して波風を立てず、喫煙者は勤務中も副流煙を周囲に撒（ま）き散らして非難もされない、摩訶（まか）不思議な時代だった。

優しく温和な日本人がタバコ問題になると牙をむく

反タバコ運動草創期から初期は、手堅く手強（てごわ）く、打っても響かない強

固な壁が感じられ何度も絶望的になった。世論も味方になってくれない空気に、一生この苦しいタバコにさらされなければならないのかと、悲嘆に暮れたこともあった。

優しく温和な日本人が、ことタバコにクレームを言うと無理解で、時に牙をむく。私は長い運動の中で、タバコ問題だけは日本人のタブーなのかと思った。和をもって尊しとなす日本人の寛容精神が、受動喫煙の害さえも我慢でヨシとするのか、と何とも哀しかった。

大好きな日本ではあるが、タバコに対する人々の反応を体験して行く中で、この国から逃げ出して、まともに悪いものには蓋をして規制し、国民の健康を守る当たり前の国へ行きたい、と思ったことである。

曲がりなりにも日本のタバコ規制も少しずつ他の先進国に近づいては来た。微力ながらも、この国のタバコ規制を進めることはできた。全国の反タバコ運動家と共に。犠牲は小さくなかったが、この国を少しは変えることができた、という自負はある。

しかし、残念ながらまだライフワークは続く。今も外食では禁煙店探しに相当時間を取られるし、路上禁煙地域が増えてもお構いなしに喫煙する輩は後を絶たない。タバコ広告もタバコ規制枠組み条約に違反してまかり通る。タバコを冠したスポンサーシップも健在の日本。等々。ため息が出る。

タバコ煙に苦しむ者への理解はいまだ進まない

長々と述懐したが、運動の苦労話の披露が主眼ではない。反タバコ運動に関わった中で体験したほんの一例の紹介だが、この国をタバコという切り口で眺めると、様々な問題が見てとれることを理解してもらえると思うのだ。日本人のタバコ感、である。時代を経て、大分変化はしたが、どうも諸外国とは違うのだ。

その象徴的な会話がある。

「この店は全面禁煙ですか」と聞くと、「はい、そうなんです。すみません」と気の毒そうな顔で謝る禁煙店。

「大丈夫ですよ。どうぞどうぞ」と、何を早合点したのか、にこやかに誘い入れる喫煙店。

飲食店入り口で何回となく交わした会話。今もって健在だ。これが日本人の善良な市民のタバコ感覚なのではなかろうか。喫煙者は肩身が狭いと同情を寄せる。喫煙者の長きにわたる既得権意識が非喫煙者にまで浸透しているのか。

一方タバコ煙に苦しんでいる者への理解はいまだ浸透していない。タバコで苦しむ人はゴマンといるのに、残念ながら余り声を上げてくれない。無口な非喫煙者がこぞって声を上げてくれたら、もっとスピーディーに禁煙化が進むだろうに。多くは我慢と遠慮。NO（ノー）と言わない、言えない優しい日本人が多いのだ。

それをいいことに日本のタバコ会社の傲慢さ。そしてタバコ対策に消極的なこの国の怠慢がある。

タバコはすき、きらい、の嗜好問題ではない。有害物である認識がもっと真摯に浸透すれば、タバコの出番はないはずなのだ。環境問題や食品偽装に敏感な日本人が足元にあるタバコにNOという声を上げないのは残念至極だ。

さて東京五輪のタバコ問題に戻ろう。これだもの、禁煙五輪にという話になった時、びっくり、あわてる五輪関係者がいても想定内である。喫煙者のために喫煙所を設置し、禁煙ではなく分煙でいきましょう、との声が臆面もなく上がる国なのだ。喫煙者と非喫煙者の共存を声高に言ってきたJT（日本たばこ産業）の罪は大きい。有害煙を吐き出す者と吸わされる者が共存できるわけがない。和を取り違えている。

世界の目が集まる大イベントである。分煙でお茶を濁すことなど絶対にあってはならない。世界標準に今こそセットすべきチャンスである。文科省も厚労省もスポーツ省も出番である。うち揃って受動喫煙防止啓発をするべきだ。

心優しい日本人に、改めてタバコの害と受動喫煙防止の重要性を認知させ、吸わない者も吸わされる理不尽にきっぱりNOといえる日本人を増やし、育てなければならない。タバコはNOといえる土壌作りが、今更ながら必要である。その絶好の機会が2020東京五輪なのである。

訂正とお詫び

3月号の本欄21頁、写真説明で「近畿日本鉄道のプラットホーム上にある喫煙ルーム」は「JR名古屋駅プラットホーム上」でした。訂正しお詫びいたします。

E-Mail Facebook Twitter で 東京を禁煙都市にする 国民運動に参加下さい。

1年前、5月の「世界禁煙デー」（5月31日）と禁煙週間（5月31日～6月6日）では、厚生労働省が「2020年、スモークフリーの国を目指して～東京オリンピック・パラリンピックに向けて～」をテーマに掲げ、受動喫煙防止の普及啓発を訴えたことになっています。そして、全国の各所、職場にポスターが掲示されました（写真）。このポスターには、下段に目立たないようにテーマが記されています。そのことに気付いた国民は、ほとんどいなかったことでしょう。肝心の「受動喫煙防止」の文字は、見当たりません。ポスターづくりの素人が見ても、オヤッと思うものでした。今年も2カ月ほど後に「世界禁煙デー」がやって来ます。

（本誌・河田英治）